教科書との対応

三省堂 中2『現代の国語2』p.136～139「漢詩の世界」
光村図書 中2『国語2』p.164「律詩について」

次の漢詩（訓読文・白文・書き下し文）と、現代語訳・解説を読んで、あとの問いに答えなさい。

春望　　杜甫

国破レテ山河在リ
城春ニシテ草木深シ
感ジテハ時ニ花ニモ濺ギレ涙ヲ
恨ンデハ別レヲ鳥ニモ驚カスレ心ヲ
烽火連ナリ三月ニ
家書抵ル万金ニ
白頭掻ケバ更ニ短ク
渾ベテ欲ス不レ勝ヘ簪ニ

（書き下し文）春望
国破れて山河在り　城春にして草木深し
時に感じては花にも涙を濺ぎ　別れを恨んでは鳥にも心を驚かす
［　X　］家書万金に抵る
白頭掻けば更に短く　渾べて簪に勝へざらんと欲す
（白文）国破山河在　城春草木深　感時花濺涙　恨別鳥驚心
烽火連三月　家書抵万金　白頭掻更短　渾欲不勝簪

（注）城＝城壁に囲まれた町。ここでは都の長安。烽火＝戦いを知らせるのろし。抵る＝値する。簪＝冠を髪にとめるかんざし。勝へざらんと欲す＝たえられなくなりそうだ。

【現代語訳】

国は戦乱でこわれてしまったが、山や川は昔のままにある。都の町には春がめぐってきて、草や木が深くしげっている。世の中のありさまを悲しんで、花を見ても涙をこぼし、家族との別れをつらく思って、鳥の声にも心が乱れる。戦いを知らせるのろしは［ａ］上がり続け、［ｂ］は、［ｃ］に値するほど貴重である。白くなった頭をかくと、髪はいよいよ短く薄くなり、もう冠をとめる簪もさせなくなりそうだ。

【解説】

唐の詩人杜甫（七一二～七七〇）は、安禄山の反乱で都の長安が攻め落とされたとき、反乱軍に捕らえられ、家族と離ればなれになった。この詩は、そのころ長安で作られた。

第一句と第二句では、1こわれてしまった人の世と、変わらない自然とが向かい合わせにされている。国は戦乱でくずれ去ったのに、山や川は少しも変わらない。春の町にしげる草木は、人が去って荒れた都のありさまでもある。

第三句と第四句の花と鳥は、ふだんなら人の心を明るくするものである。しかし、ここでは花も鳥も、悲しみをいっそう深くするものになっている。第五・六句では、長く続く戦いと、なかなか届かない家族の便りがよまれる。最後の二句で、作者は2すっかり年老いてしまった自分の姿に目を向ける。国を思い、家族を思う日々の苦しみが、作者の体にまで表れているのだ。

（漢詩は杜甫「春望」　注・現代語訳・解説は創心館オリジナル）

問一 この詩の形式を、漢字四字で答えなさい。

問二 この詩で押韻している字を、訓読文からすべて抜き出し、句の順に書きなさい。

問三 書き下し文の［ X ］に入る第五句を、訓読文の返り点と送り仮名にしたがって、書き下し文に直しなさい。

問四 第三句「感時花濺涙」を、返り点にしたがって読む順番に、漢字を書き並べなさい。

問五 第一句と第二句は対句になっている。第一句の「国破れて」「山河在り」に対応する部分を、第二句の書き下し文からそれぞれ抜き出しなさい。

国破れて

山河在り

問六 【現代語訳】の［a］～［c］に入ることばとして最も適切なものを、次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 三年もの間　イ 三か月もの間　ウ 家族からの手紙
エ 都からの知らせ　オ 大金　カ わずかなお金

a　b　c

問七 1こわれてしまった人の世と、変わらない自然とあるが、第一句・第二句の説明として最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 戦乱で国はくずれても、山や川や草木は変わらずにあることを対比している。
イ 戦乱で山や川も荒れはて、草木もかれてしまったことを悲しんでいる。
ウ 春がめぐってきて、国が元どおりに立ち直ったことを喜んでいる。
エ 草木がしげった町に、たくさんの人々がもどってきた様子をえがいている。

問八 律詩の決まりで、対句にすることになっている句の組み合わせとして正しいものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 第一・二句と第七・八句
イ 第三・四句と第五・六句
ウ 第二・四句と第六・八句
エ 第一・三句と第五・七句

問九 第三句・第四句の花と鳥は、作者にとってどのようなものになっていると、解説の筆者は述べているか。解説から十五字以内で抜き出しなさい。

問十 2すっかり年老いてしまった自分の姿とあるが、作者がこのような姿になったのはなぜか。「国」「家族」という二つのことばを使って、四十字以上、五十字以内で書きなさい。

解答と解説

漢詩 標準③ 春望（杜甫）

春望

問一 五言律詩

【根拠】詩は第一句〜第八句の八句。どの句も「国破山河在」のように五字。

【読み方の型】四句＝絶句・八句＝律詩、一句五字＝五言・七字＝七言。白文の漢字で数える。

【よくある間違い】「五言絶句」……絶句は四句の詩。この詩は八句。／「七言律詩」……送り仮名を数えない。一句の漢字は五字。

問二 深・心・簪

【根拠】第二句「深（シン）」・第四句「心（シン）」・第六句「金（キン）」・第八句「簪（シン）」。

【読み方の型】五言の詩は偶数句の終わりで韻をふむのが基本。音読みして「〜ン」のひびきを確かめる。

【よくある間違い】第一句の「在（ザイ）」を入れる……ひびきがちがい、韻をふんでいない。／「深・心・簪」だけ……「金（キン）」も「〜ン」で終わる。偶数句は四つとも確かめる。

問三 烽火三月に連なり

【根拠】第五句の訓読文「烽火連ナリ二三月ニ一」。

【読み方の型】「烽」「火」を読み、二点の「連」はとばす。「三」「月」と読んで一点まで来たら「連」にもどる。送り仮名「ニ」「ナリ」はひらがなにする。

【よくある間違い】「烽火連なり三月に」……返り点を無視している。／「烽火三月ニ連ナリ」……送り仮名をかたかなのまま書いている。

問四 時感花涙濺

【根拠】第三句の訓読文「感ジテハレ時ニ花ニモ濺ギレ涙ヲ」と、書き下し文「時に感じては花にも涙を濺ぎ」。

【読み方の型】レ点は、下の一字を先に読んで一字上にもどるしるし。「感」をとばして「時」→「感」、次に「花」、「濺」をとばして「涙」→「濺」。

【よくある間違い】「感時花濺涙」……白文の順のまま。／「時感涙濺花」……返り点のない「花」は、出てきた順に読む。

問五 国破れて＝城春にして　山河在り＝草木深し

【根拠】第一句「国破れて山河在り」と第二句「城春にして草木深し」。

【読み方の型】対句は、組み立てがそろった二つの句。同じ位置の語どうしを比べる。「国／城」（場所）、「破れて／春にして」（そのありさま）、「山河／草木」（自然）、「在り／深し」が対応する。

【よくある間違い】「国破れて」に「城春」だけ……送り仮名・助詞（にして）まで、句の前半をまるごと抜き出す。

問六　a　イ　b　ウ　c　オ

【根拠】a＝第五句「三月」。b＝第六句「家書」。c＝第六句「万金」。

【読み方の型】漢詩の数のことばは、今の日本語と読み方・意味がちがうことがある。ここの「三月」は「さんげつ」と読み、三か月のこと。「家書」は家族からの手紙、「万金」は大金。

【よくある間違い】aに「ア　三年もの間」……「月」を見落としている。ここは「三月（さんげつ）」＝三か月。なお「三月」を「春の三月（になっても）」と読む考え方もあるが、このプリントの現代語訳は「上がり続け」なので、期間を表す「三か月もの間」が合う。／cに「カ　わずかなお金」……「万金」は一万の金。それほど手紙が貴重だということ。

問七　ア

【根拠】第一句「国破れて山河在り」・第二句「城春にして草木深し」。解説の第二段落「国は戦乱でくずれ去ったのに、山や川は少しも変わらない」。

【読み方の型】対句の二つの句を、「人の世（国・城）」と「自然（山河・草木）」に分けて比べる。「破れて」と「在り」の反対の意味が、対比の決め手。

【よくある間違い】イ……「山河在り」は山や川が変わらずにあること。「草木深し」も草木がしげっていること。／ウ……国は「破れて」いる。立ち直ってはいない。／エ……草木がしげるのは、人が去って都が荒れているから（解説の第二段落）。

問八　イ

【根拠】律詩の形式の決まり。この詩でも第三・四句と第五・六句が対句。

【読み方の型】律詩は、二句ずつのまとまり（第一・二句、第三・四句、第五・六句、第七・八句）で読む。まん中の二組を対句にするのが決まり。「春望」は、決まりにない第一・二句も対句にしている。

【よくある間違い】ア……第一・二句はこの詩では対句だが、決まりではない。第七・八句は組み立てがそろっていない。／ウ……偶数句は押韻の位置。対句の決まりとまちがえない。

問九　悲しみをいっそう深くするもの

【根拠】解説の第三段落「ここでは花も鳥も、悲しみをいっそう深くするものになっている」。

【読み方の型】「ふだんなら……。しかし、ここでは……」のように、逆接（しかし）の後に筆者の言いたいことが来る。問いの「どのようなものになっている」と同じ形の部分をさがす。

【よくある間違い】「人の心を明るくするもの」……「ふだんなら」のときの花と鳥で、この詩の中の花と鳥ではない。逆接の前と後を取りちがえている。なお、この二句は、花や鳥を主語にして「花までが涙を流し、鳥までが心を痛める」と読む考え方もある（教科書の注を確かめる）。

問十　（例）戦乱でこわれた国を悲しみ、離ればなれになった家族の身を案じ続ける苦しみの日々を送ってきたから。

【根拠】第七句「白頭掻けば更に短く」・第八句「渾べて簪に勝へざらんと欲す」。解説の第三段落「国を思い、家族を思う日々の苦しみが、作者の体にまで表れている」。

【読み方の型】「なぜか」の記述は「～から。」で結ぶ。詩の前半（国の荒廃＝第一～四句）と後半（家族の便り＝第五・六句）の二つの悲しみを、指定の二語でまとめる。（採点：①こわれた国を悲しむこと、②家族を心配すること、③苦しみ（心労）で年老いたこと。三つで正解、二つは部分点）

【よくある間違い】「年をとったから」だけ……詩が言いたいのは、苦しみのために年老いたこと。／「髪を切ったから」……「更に短く」は髪が抜けて少なくなること。